

「マニ教反駁書」における「意思」の問題

菊 地 伸 二

はじめに

アウグスティヌスは、青年時代にマニ教に入信し、およそ9年間そこに留まった。やがて、新プラトン主義の思想と出会ったり、カトリック教会の教えに触れたりすることにより、そこから脱出し、カトリック教会へと回心する。アウグスティヌスが、多数のいわゆる「マニ教反駁書」を著し始めるのはその後のことである。

彼がマニ教に入信したきっかけの一つには、悪の原因の解明があげられる。彼はマニ教のうちにその可能性を求めたが、結局それは叶わなかった。アウグスティヌスの「マニ教反駁書」における論点の一つにはマニ教の悪の理解に対する批判がある。その際、アウグスティヌスは、悪の原因として人間の「意思」の問題を取り上げるのであるが、この小論では、「マニ教反駁書」における「意思」の問題について、『二つの魂』と『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』の二つの作品を取り上げて検討することにした。

しかしその前に、いわゆる「マニ教反駁書」は、具体的にどのように執筆されているのかを見ておくことにしたい。

1. 「マニ教反駁書」について

アウグスティヌスの初期の著作には、少なからずマニ教徒に対する反駁的な要素が含まれていると言えなくもないのであるが、なかでも次の諸作品は、そのような要素が全体に滲み出ていると言ってよいであろう。作品とそのおおよその執筆年代を具体的に記すと次の通りである。

- ・カトリック教会の道德とマニ教徒の道德 (388～389年)
- ・マニ教徒に対する創世記注解 (388～390年)
- ・自由意思論 (388～395年)
- ・真の宗教 (390年)
- ・信じることの効用 (391～392年)

- ・二つの魂 (391～392年)
- ・マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論 (392年)
- ・マニの弟子アディマントゥス批判 (394年)
- ・基本書と呼ばれるマニの手紙批判 (396年)
- ・マニ教徒フェリクス批判 (398年)
- ・マニ教徒ファウストゥス批判 (400年)
- ・善の本性 (400年)
- ・マニ教徒セクンディヌス批判 (400年)

この小論で取り上げる『二つの魂』と『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』は、ともにアウグスティヌスが司祭になってから執筆されたものであり、カトリック教会の聖職という責任ある立場からマニ教を批判したものである。とくにこの二つの作品では、悪の原因を人間の「意思」のうちに認めるという立場からマニ教を批判している点で共通している。

そこでまず、『二つの魂』という作品を見ることにしたい。

2. 『二つの魂』における「意思」

『二つの魂』は、特定のマニ教徒を相手にじっさいに反駁する、というような体裁をとっているわけではなく、アウグスティヌスのなかで、仮想のマニ教徒を念頭に置いて対話をしながら、あるいはまたときには、マニ教徒に属していた頃の自らと対話を続けながら、マニ教の考えを反駁しようとするものである。

では、この作品では、どのようなことを反駁しようとする意図が働いているのであろうか。このことについては、『再論』において次のように述べられている。

この書物(『信ずることの効用』)に続いて、まだ司祭であったころ、わたしはマニ教徒を反駁して、『二つの魂』を書いた。

マニ教徒によれば、二つの魂のうち、一方は神の部分であり、他方は、闇の種族に属し、神が造ったものではなく、神と等しく永遠な

るものである。そして彼らは、愚かにも、それぞれの人間のうちに、この両方の魂——一方は善であり、他方は悪である——が存在すると主張している。すなわち、後者の悪しき魂は肉体の特性であると言っているが、この肉体は、彼らによれば、闇の種族に由来するものである。他方、前者のよき魂は、神の付加的部分から由来し、闇の種族と戦い、両者は混合する。マニ教徒は、人間の持っているすべての善をこの善き魂に帰し、すべての悪をこの悪しき魂に帰している⁽¹⁾。『再論』I, 15, 1)

アウグスティヌスが、この作品の中で意図したことはこの叙述でおおむね明らかであろう。すなわち、マニ教のいわゆる二元論的な捉え方に対して、すべての存在は神に由来するものであることを主張するのがアウグスティヌスの意図に他ならなかった。もちろん、マニ教徒が「二つの魂」という捉え方を本当にしていたかどうかは不確かな点もなくはないが、少なくとも、アウグスティヌスは、そのように捉えることによって、マニ教を批判の土俵にあげて問題にしようとするのである。

ところで、『二つの魂』において、「魂」についてのアウグスティヌスの主張は、大きく二つあると思われるが、その一つが「魂の生命性」ということである。彼は、この立場にしっかりと立ちながら、マニ教を反駁するのである。

まずあの二種類の魂についてであるが、彼らはそれぞれ固有の本性を帰属させ、一方は神の実体そのものに属するが、他方は神が造ったものではないと解させようとしている。もしわたしが、神に対する祈りをこめた敬虔な思いをもって、慎重に用心深く考察したならば、おそらくどのような生命であれ、それが生命であるという事実によって、またまさに生命である限りにおいて、生命の最高の源泉と根源に属さないようなものは存在しないことが、わたしにも十分明らかになったであろう。生命の最高の源泉と根源とは、ほかならぬ最高唯一の真なる神であるとわれわれは告白せざるをえない…⁽²⁾。(1, 1)

魂は、魂であるかぎり生命を有していること、

そして、すべての魂は神に由来しているということ、すなわち、魂の生命はその源泉を神に有している、ということがここで確認される。もちろん、ここでいう神に由来するとは、魂が神によって造られた、という意味においてである。

このようにして、マニ教が主張する善に由来する可視的な光だけでなく、彼らが悪に由来すると主張する悪徳も、それが「魂」の徳に関わる限りにおいて神に由来すると言うのである。

もう一つの「魂」についての主張、それは、「魂の運動性」ということである。そしてその運動を可能にしているものについては、次のように言われるのである。

したがって、人が罪を犯すのはただ意思によってである。ところで、われわれの意思はわれわれによく知られている。意思そのものが何であるかを知らなければ、わたしが意思していることを知らないからである。そこで次のように定義されよう。

意思とは、何ものにも強制されることなく、何かを失うまいとする、あるいは確保しようとする、魂の運動である。(10, 14)

ここでは、「魂の運動性」が問題にされるとともに、そのような魂の運動を可能にするものとして意思の存在が確認されるのである。意思について、何ものにも強制されることがない、と言われている点は、とくに、マニ教の悪の理解との関連では重要な意味を有していると思われる。というのも、マニ教徒は、悪は、人間にとってはいわば強制されるものである、という見方をするからである。さらに、罪についても、意思との関係において次のように言われている。

罪とは正義が禁じ、かつそれを差し控える自由があるものを、保有したり、追い求めたりする意思のことである。自由がなければ意思ではないことは言うまでもない。(11, 15)

ここにおいて、悪の原因（罪の原因）が自由意思にあることが明言されることになり、マニ教の悪の原因の捉え方とはっきりと袂を分かつことになるのである。

アウグスティヌスは、人間のうちに存在する複数の意思の存在から、必然的に複数の魂の存在が帰結されるのではなく、むしろその反対に、そ

のことは魂が一つである、ということの意味していると言うのである。

決断する際に、時に、善の側に同意し、時に、悪の側に同意したりすることから、二種類の魂の存在を明らかにすることを学ぶべきであろうか。むしろ、あの自由な意思によってあちらこちらに運ばれたり、あちらこちらから連れ戻されたりすることの、一つの魂のしるしではないだろうか。(13, 19)

彼によれば、「ある場合は罪へ傾き、ある場合は正しい行為へと導かれ、われわれの思索が二つの方向へ激しく揺れ動く…」(13, 21)、この揺れ動く(nutare)という現実、これこそが、彼が、人間存在のうちに見ていたことがらだったと思われる。マニ教徒は、これを善悪の原理によって説明するのであるが、そのように説明することによって、揺れ動いている、という現実の切実さは希薄になってしまう。むしろ、彼は、人間の、さまざまな方向に揺れ動く、という現実を重く受けとめており、まさしくそのようなあり方から解放されることを強く求めていた、といえるであろう。

この揺れ動く、という言葉に對置されるものとして、アウグスティヌスが好んで用いた、神に固着する(inhaerere Deo)という表現があることを記憶しておきたい。

そして、そのようなことの何よりも証拠が、悔い改めではないか、と彼は言うのである。

あの有益な悔い改めの感情が、悔い改めた者が悪を行ったこと、また、彼は善を行うことができたことの証拠になる。(14, 22)

『二つの魂』は、ペラギウス論争においては、相手にとって有利な証言ともなりえたであろうし⁽³⁾、また、「パウロ書簡」とも一見矛盾するような叙述も見られるものの⁽⁴⁾、彼が、マニ教徒に對してもっとも反駁したかったこと、それは、善と悪が本性的に存在しており、その対立が永遠にあったかのような印象を与えるマニ教徒に對する反駁であったということは確かであろう。

それでは次いで、『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』を取り上げて、アウグスティヌスがどのようにマニ教を反駁しているかを見ることにしよう。

3. 『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』における「意思」

先に取り上げた『二つの魂』は、いわゆる仮想のマニ教徒を想定して、それに対して反駁していくという筆致で作品は進められていたが、ここで取り上げる『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』は、その題名にあるとおり、マニ教徒の指導的立場にあるフォルトゥナトゥスとアウグスティヌスとの間で、392年8月28日、29日にヒッポ・レギウスで行われた公開討論である。

ここでは主として、マニ教の善悪二元論、悪の起源についてカトリックの信仰の立場から批判がなされている。その流れを、実際に章を追いつながって見ていくことにしたい。

討論の冒頭でアウグスティヌスは、マニ教の誤謬について次のように語る。「最大の誤謬だと思うのは、われわれにとって唯一の希望である全能なる神が、幾分は侵されたり、汚されたり、損なわれたりする、と信じていることである⁽⁵⁾。」(1)

この主張は、本作品を最後まで貫いている重要なものであるが、このような信念をマニ教徒が果たしてあからさまに標榜していたかというやや疑念は残るところである。むしろアウグスティヌスによるならば、マニ教の主張を総合すると、全能なる神が、結局のところ、侵されたり、損なわれたりすることによって、全能ではないことを主張していることになる、ということである。そして、その元となっているマニ教の教説とは次のようなものである。すなわち、「闇の種族とかいうものが神の王国に對して反抗したが、全能なる神は、向かってくる種族に何かを對抗させ、それに抵抗しなければ、どれほどの破壊と荒廃とが自分の王国を脅かすかを見て、この力を派遣したが、それが悪しき闇の種族と混合することによって世界は造られた」(1)と言うものであり、「こうして善なる魂はこの世で勞苦し、仕え、誤りを犯し、損なわれることになり、彼らをこの誤謬から浄め、混合から解放し、奴隷状態から自由にしてくれる解放者を必要とする」(1)と言うものである。アウグスティヌスが説くマニ教の教説については、その発言の直後に、フォルトゥナトゥスによっても是認されるのであるが(1)、フォルトゥナトゥスは、その後の討論の方向性を、マニ教の

信仰に関する問題に対してよりも、むしろ、マニ教徒の習俗に対して向けるように努めるのである(1～3)。

しかし、それに対してアウグスティヌスは、その習俗(生活様式)について十全に知りうるのは、マニ教の中での特権者である「選ばれた人」だけであるとし、この討論に参加している人びとも開かれた議論が展開されるために、マニ教の信仰を問題にするようにと提言し、フォルトゥナトゥスはそれに応じて、マニ教の信仰理解を表明するのである(3)。

この後、アウグスティヌスは、人間の魂を、そもそも死へと追いやった原因を問題にしようとするのに対して、フォルトゥナトゥスは、神のほかには何ものも存在しないかどうかを問題にすることを主張する(4～5)。

アウグスティヌスによれば、神はいかなる必然性をこうむることもありえず、けっして侵されたり、損なわれたりしないのであるから、何故、神はいかなる必然性によって魂をこの世へ送ったのか、そのことを問題にすべきであると主張するのに対して、フォルトゥナトゥスによれば、神のほかには何ものも存在しないのであるとすれば、どのようにして、またいかなる原因によって、魂がこの世へやってきて、その結果として、神が、それに等しい子を通して、この世から魂を解放しなくてはならないのか、そのことを問題にすべきであると主張するのである(6)。

アウグスティヌスにおいては、何よりも、神があらゆる必然から自由であること、また、神が侵されたり、損なわれたりしないこと、すなわち、神が不可滅であることが守られなくてはならないのであり、その観点からすれば、神の本質を有するとされる魂が、そもそもこの世界に送り込まれて混合する、というような事態はありえないことなのである。

他方、フォルトゥナトゥスによれば、神の子によって魂が解放されるためには、それ自体は神の本質を有している魂とはほかのものが存在していて、それによって魂が囚われている、ということが前提されている、ということなのである。

神が不可滅で不可侵である以上、破滅と荒廃が自分の王国を侵すのを見て、闇の種族と戦う力を

派遣し、その混合によって人間の魂は労苦する、というマニ教の教説は間違っていると、さらにアウグスティヌスは主張を繰り返す(7)。もし、神が不可侵であるならば、神は闇の種族によっていかなる害を受けることもないわけであるから、神はいわれなしにわれわれがこの世で災いを受けるように送ったことになるが、これは如何にも滑稽なことではないだろうか。しかし、フォルトゥナトゥスは、神がわれわれをこの世に送ったことの意味を考える方向で答弁を進め、その際、「キリストは自らをむなしくして、僕の形をとってこの世に來られた」と言われている「フィリピの信徒への手紙」の言葉を用いながら、人間そのものについて考えようとするのである。キリストは、自らのうちに死の相を示し、死人の間からよみがえった自分が、父からのものであることを示した、ちょうどそのように、われわれの魂の将来についても、彼によってこの死から解放されることができると思っている、と主張するのである(7)。すなわち、フォルトゥナトゥスによれば、キリストが苦難と死のうちにあったのと同様に、われわれもまた苦しむのであり、キリストが父の意志によって苦難と死のうちにくだったのと同様に、われわれが苦しむのも、父の意志によるのである(8)。

人間がどのようにして死から解放されるかを問題にするフォルトゥナトゥスに対して、アウグスティヌスは、あくまでもわれわれ人間はどのようにして死に至ったかを問題にしようとする。そして再度、問題を投げかける。すなわち、「もし神が害を受けることがありうるとするならば、神はもはや不可侵ではないし、もし、その反対に神が害を受けることがありえないとするならば、神は、残酷にも、われわれがこのような災いをこうむるように、われわれをこの世へ送ったことになる」と(9)。

ここでフォルトゥナトゥスは、魂が神に属するかどうか、それをアウグスティヌスに問う(9)。

さらに、魂は独自に活動するのであるかどうかとも問う(10)。

これに対して、アウグスティヌスは、魂は、神ではなく、神と魂とは別物であると答える。というのも神は、不可侵であり、不滅であり、汚されないのに対して、魂は、罪を犯し、災いの中に巻

きこまれ、真理を求め、解放者と必要としているからである。このような変化をするということ自体が、魂は神とは異なることの証しなのである(11)。

アウグスティヌスによれば、魂が神であることを否定する意味で、魂が神の実体であることを否定しているのであり、しかしながら、魂は、神によって造られたのであるから、魂は創造主としての神からのものである。しかしこのことが、フォルトゥナトゥスには理解しがたいことなのである(12)。アウグスティヌスによれば、魂は神によって造られた、その意味で、神に由来するのであるが、それにもかかわらず、魂が神とは異なるのは、神が魂を無から造った、ということにある(13)。このことは、魂のみならず、すべての被造物にも該当することであり、すべての被造物は、神から造られた、という意味で神に由来するが、しかし、無から造られたがゆえに、神とは異なったものなのである。フォルトゥナトゥスは、しかし、この被造的な世界にあるさまざまなものは、確かに、造られたものである、という点では、共通しているかもしれないが、それらのものは、互いにも異なり、時として対立しているように思われる旨を主張する。ここには、フォルトゥナトゥスの事実観察的な視点があると言ってよいであろう。このような事実認識から、彼は、二つの実体、すなわち、一つは物体のそれを、もう一つは永遠なるそれを想定することへと導かれるのである(14)。

これに対しては、アウグスティヌス自身も、この世界に対立的な要素があることを必ずしも否定しているわけではないが、しかしこのことから、別の方向へ思考は向かうのである。すなわち、対立的なものを生み出したのは、われわれの罪のゆえ、つまり、人間の罪のゆえに生じたものであることである。そして、さらにその人間に罪が生じたのは、人間のなかにある自由意思のためなのであって、そのことについては次のように言われている。「実際、神は万物を善なるものとして造り、よき秩序を与え、罪は造らなかつた。悪と呼ばれるのは、われわれの意思による罪だけである。別の種類の悪があるが、それは罪の罰である。それゆえ、罪と、罪の罰と、二種類の悪があ

ることになるが、罪は神に属さず、罪の罰は報復する者に属する。なぜなら、万物を造った神は、善きものであるとともに、正しいものでもあるので、罪に報復する。それゆえ、万物は今われわれに反対のようにみえるが、最善の仕方ですべてに反れているので、神の律法に従おうとしない墮落した人間に、罰は当然の報いとして起こる。なぜなら、人間のうちにある理性的魂に、神は自由意思を与えたからである」(15)と。

さらに続いて次のように言われる。「神は、神の律法に従うこの魂に、万物が対立しないで服するようにしたので、もし魂自身が神に仕えようとした場合には、神が造った他のものも、魂に仕えるべきである。しかし、もし魂が神に仕えようとしなかった場合には、魂に仕えていたものが、魂の罰に変わるのである」(15)。ここには、この世の対立的なものは、あくまでも、魂が神に仕えることをしないことに由来することであるという考えが表明されている。

ただ、このようにこの世界にある対立的なもの、あるいは、端的に言うならば、悪の存在をないものとしたり、ましてや、それを人間の自由意思に帰したりするということは、到底、フォルトゥナトゥスには受け入れがたいものであったに相違ない。じっさい、聖書の中には、とりわけ、「パウロ書簡」の中には、フォルトゥナトゥスに味方するような証言があるではないか。「エフェソの信徒への手紙」2章の長い聖書の箇所(1～18節)が引用されるのである(16)。

しかしながら、フォルトゥナトゥスが自分の主張の後ろ盾にしようとした聖書の箇所は、アウグスティヌスによれば、まさしく、自分の主張に味方する箇所であることを述べる(17)。今ここで、「パウロ書簡」をめぐる二人の解釈の是非を問うことはしないが、少なくとも、アウグスティヌスが、フォルトゥナトゥスとの討論を通して、「パウロ書簡」をどのように解釈するか、ということに重要な意味を見出していたことは確かであろう。

アウグスティヌスは、「パウロ書簡」から、人間の自由意思が強調されていることを確認するのである。「まずそこでは、使徒が罪について言及し、神とわれわれの和解はイエス・キリストによって生ずると述べたときに、魂はそれによって罪を犯

すようになるとわたしが言った、自由意思そのものが、十分明らかになっているからである。なぜなら、われわれは罪を犯すことによって神から離反したが、キリストの戒めを守ることによって神と和解するからである。そして罪によって死んでいたわれわれは、彼の戒めを守ることによって生かされ、われわれが彼の命令を守らずに離れていた一つの霊において、彼との間に平和をもつようになるのである」(17)。

さらに、アウグスティヌスは、「ローマの信徒への手紙」を引用しながら、フォルトゥナトゥスがその箇所をどのように解釈するかを問うのであるが、その中で、聴衆の間から騒ぎが起こり、一日目の討論は幕が引かれ、散会となる(19)。

二日目の討論において、アウグスティヌスはまず、神の尊厳により相応しい信仰とは何か、を問題とする。すなわち、神のある部分が変化し、侵され、そこなわれ、とらわれていると主張するか、それとも、全能なる神とその本性、実体は決してそこなわれることがなく、悪は神が自由意思を与えた魂の意志的な罪によって存在すると主張するか(20)。

フォルトゥナトゥスにとっては、自由意思によって悪が生じた、ということが十分に理解できていないように思われる。例えば、次のように主張している。「もし悪が神からのものであるならば、あなたは神が自由意思を与えたと言っているので、神は罪を犯す許可を与えたことになり、すでにわたしの罪過の張本人であるという意味で、わたしの罪過の共犯者と見なされるか、それとも、わたしがどういう者になるかを知らず、わたしを神に相応しいものに造りそこなったか、のいずれかであることになる(20)。

それに対して、アウグスティヌスは、自由意思について次のように述べるのである。「自由意思の選択は、最初に造られた人間のうちにあった、とわたしは主張する。彼は、神の戒めを守ろうとした場合、彼の意思にさからうものが全く何もないように造られた。しかし、彼が自由意思によって罪を犯した後は、彼の子孫であるわれわれは、必然性のうちに真逆さまに突き落とされてしまった。われわれのうちの誰でも、普通に考えれば、わたしの言っていることが真実であるとわか

るはずである。実際、今日でも、われわれの行為において、何らかの習慣に巻き込まれてしまうまでは、われわれは何かをしたり、しなかったりする自由意思をもっている。しかるに、その自由によってわれわれは何かをなし、その行為のもつ有害な甘美さと快楽とが魂をとらえてしまうと、罪を犯すことによって自分で造りあげたものを後になって征服することができないほどに、魂は自らの習慣に巻き込まれてしまうのである」(22)。人間はたしかに自由意思を与えられたが、それを正しく使用しなかったために、それが自由に行使できない状態、すなわち、必然性のうちに突き落とされたのであり、それが罰の現実というものである。習慣に巻き込まれてしまい、自由意思は働かない状態となっている。さらに次のように言われる。「肉の思いは、すなわち、肉でつくられた習慣は、われわれの精神が照らされ、神が人間全体を、神の律法を選ぶようにご自分に従わせると、魂の悪しき習慣のかわりに、善き習慣をつくり出すのである」(22)。

こうして次のように言われることになる。

「それゆえ、われわれが土の人間のかたちを担っている限り、すなわち、われわれが肉（それはまた古い人間と呼ばれるが）に従って生きている限り、われわれは、欲することをすることができないという、習慣の必然性を持っている。しかし、神の恵みがわれわれに神的な愛をふきこみ、われわれを彼の意思に従わせてくれると（それについては、「あなたがたは自由へと呼び出されたのである」また、「神の恵みがわたしを罪と死との法則から解放してくれた」と述べられているが、罪の法則とは、罪を犯した者は誰でも死ぬということである）、われわれは正しい者になりはじめ、その法則から解放される（liberare）のである」(22)。

この世界において魂が何故不幸に巻き込まれているか、ということをめぐっては、アウグスティヌスとフォルトゥナトゥスとの間には見解の一致をみることは不可能であり、平行線のままであると言ってよいであろう。

アウグスティヌスは、再度明確に述べる。「魂は罪を犯し、その結果不幸になった。魂は自由意思を受けとり、自分の欲するように自由意思を用

いた。魂は至福から落とされ、投げ出されて、不幸に巻き込まれてしまった」(25)と。

アウグスティヌスによれば、害を受けることのありえないものが、なぜ、われわれをこの世に送ったのか、というのがマニ教に対する疑義であり、このことは幾度も繰り返されている(たとえば、26、30、32、33)。フォルトゥナトゥスによれば、それは、神が魂を救い出すために必要であった、ということになるであろうが、魂を救い出すために、わざわざ、そのような残酷な手続きを神がしなければならぬ、ということがアウグスティヌスにとっては不可解なのである。他方、神から造られた魂が罪を犯すことを知っていたのであれば、なぜ、神はそれを事前に止めることができなかったのか、ということが、フォルトゥナトゥスの側からすれば、アウグスティヌスに対する疑義と言ってもよいであろう。このお互いの、相手に対する疑義は最後まで消えることなく、この討論は終わりを告げられる。

4. 「マニ教反駁書」における「意思」

以上、『二つの魂』と『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』において、アウグスティヌスがマニ教徒をどのように反駁しているかを見てきた。両者の著作は、マニ教が唱える、善と悪の、いわゆる二つの本性を批判するとともに、その際に、悪の原因としての人間の自由意思を主張している点で共通している。悪の原因が人間の自由意思にある、という考えについては、彼が回心をする前に、おそらくカトリック教会の説教において出会ったことが記されているが、その考えに出会ったころは、そのことが十分に理解できなかったということも併せて記されている。

それからおよそ5年を経て、これらの著作を執筆するころには、悪の原因は自由意思にあることを明言しながら、それを「マニ教反駁書」の中で展開している。

ところでここで取り上げた二つの著作は、今記したように、基本的な共通性があるものの、他方で相違している点もある。それは、前者は、仮想のマニ教徒を念頭におきながら論を展開するという、いわゆる仮想的対話形式で話が進められているのに対して、後者は、公開の場で行われた、じっ

さいの討論を記録したものである。また、両者ともに、意思が人間のうちにあることを認めているものの、この世界において、意思が不自由になっている、ということについては、後者の方が、より突っ込んで論じられているということがあげられる。もちろんこのことから、ただちに、前者よりも後者の方が、人間の意思についての思索が深まったと断定することは難しいだろう。むしろ、その違いは、そこで話題になった事柄に由来することが少なくないであろう。ただ、人間の意思の自由ということだけでなく、神の自由を強調しようとした点で、『二つの魂』に較べて『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』の方が、その論が展開されていると言うことはできるであろう。

「パウロ書簡」をめぐるマニ教(とくに、フォルトゥナトゥス)の解釈は、アウグスティヌスをして、「パウロ書簡」のさらなる読解へと駆り立てたことは想像に難くない。「アダムの原罪物語」、これは、アウグスティヌスの作品においてきわめて重要な位置を占めるものである。この物語は、「人間の自由」についてはもちろんのこと、神の恩恵に示される「神の自由」の確保についても不可欠なところである。

原罪の結果、われわれは罰の現実、すなわち、習慣の必然性のうちに突き落とされ、善を欲することができなくなっているが、神の恵みを受けて、精神が照らされ、意志が従うことにより、その必然性からは解放されるのであるが、それはまさしく神の自由に属する神の恩恵の働きに他ならないのである。

だが、この点は、マニ教徒はあまり重視していなかったように思われる。後に、ペラギウス論争においても、アウグスティヌスは、この「アダムの原罪物語」を強調することによって、物議を醸しだすことになるのであるが、そこでも彼は、「人間の自由」を強調するあまり、「神の自由」の確保に怠っているように思われるペラギウス(あるいはペラギウス主義者)に対して批判をするのである。

アウグスティヌスにとって、「人間の自由」を問うことは、「神の自由」というそれよりもはるかに優る完全なものを前提とする中で、有意味なものとして捉えられているのである。

註

- (1) 『再論』の日本語訳としては、『アウグスティヌス著作集 第7巻 マニ教駁論集』（1979年，教文館，岡野昌雄訳）を用いた。
- (2) 『二つの魂』の日本語訳としては、『アウグスティヌス著作集 第7巻 マニ教駁論集』（1979年，教文館，岡野昌雄訳）を用いた。
- (3) 『再論』 I，15，2.
- (4) (3) に同じ。
- (5) 『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』の日本語訳としては、『アウグスティヌス著作集 第7巻 マニ教駁論集』（1979年，教文館，岡野昌雄訳）を用いた。

Augustine on *liberum arbitrium* in *De duabus animabus* and *Contra Fortunatum*

Kikuchi, Shinji*

アウグスティヌスは、カトリック教会に回心した後、約15年間にわたり、さまざまな「マニ教反駁書」の執筆にとりかかる。この小論では、「マニ教反駁書」の中でも、とくに、聖職の道を歩み始めた後に書かれた二つの作品である『二つの魂』と『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論』を取り上げて考察する。

この二つの作品において、アウグスティヌスは、マニ教が主張するところの善悪の二つの本性を徹底的に批判するとともに、悪の原因を人間の自由意思のうちに求めていくが、そのような人間の自由の擁護は、神の自由というより完全な姿を前提とすることによって成立するものである。

また彼は、「マニ教反駁書」を執筆するという営みの中で、マニ教徒の「パウロ書簡」の解釈に出会うとともに、そのような解釈を批判する中で、自らが「パウロ書簡」のより精緻な読解へと導かれていくのであり、そのことが彼の「自由意思」の理解を深めることにつながっていくのである。

キーワード：自由, 自由意思, 神の自由, パウロ書簡, 悪の原因

*Nagoya Ryujo Junior College

